

## 藍山蜂起と『藍山実録』編纂の系譜

——早咲きのヴェトナム「民族主義」——

八 尾 隆 生

はじめに

### I 藍山蜂起

#### II 『藍山実録』編纂の系譜

結びにかえて

### はじめに

ヴェトナムではドイモイ（刷新）政策の進展により、政治・経済状況が安定し、外侵への危機感も希薄化した結果、ひところの「民族解放史観」は影をひそめ、歴史上の英雄や史跡なども観光の目玉として注目をあびるようになってきている。よって、昨今、これから取り上げる藍山（ラムソン）蜂起に関する実証的研究はふるわない。

ところが日本では、「新しい歴史教科書問題」の是非をめぐる議論が東南アジア史研究界にも飛び火し、さらにフィリピン独立の英雄ボニファシオの実像に関する議論<sup>1)</sup>の影響や、ナショナリズムを扱うベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の増補翻訳版がでたこともあって、いわゆる「公定史観」に対する関心が高まっている。

2001年度春期東南アジア史学会研究大会のシンポジウムで、筆者は自己の研究に用いる史料に即して「ナショナルヒストリー」について発表して欲しいとの依頼を受けた。前近代史研究を行う筆者にはとても対応できるものではないと躊躇したが、前近代における「史実と歴史叙述」という問題設定をし、黎王朝を生むことになる「藍山起義」の史実とその歴史叙述あるいは認識について、ヴェトナム人の15世紀から20世紀に至るまでの営為を概観し、そこから何をくみとるのか、という問題設定をするなら可能だと考え、報告に至った<sup>2)</sup>。本稿はその報告を骨子とし、本特集のテーマにそって大幅に改稿したものである。

### I 藍山蜂起

#### 1 「史実」の経過

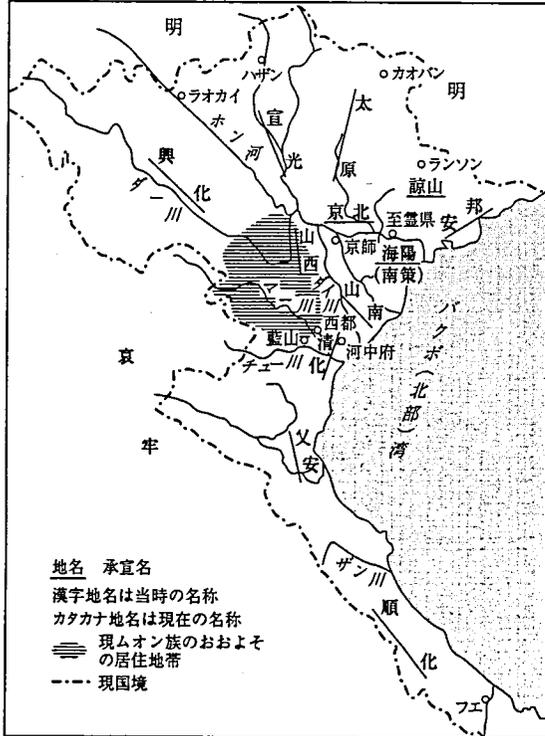
ヴェトナムでは14世紀に入るとモンゴル軍との戦いの荒廃によって陳朝宗室による政治支配が崩れ、異姓科挙官僚が政界に進出し始める。一方、社会矛盾の深刻化はあちこちでの反乱を惹起し、その鎮圧にエネルギーが費やされる。

その危機を救ったのが、陳朝の外戚で、科挙官僚の支持をとりつけた胡季犛である。彼は土地が希少価値化し、小農社会への移行が進展する状況と、宗室が非自由民の使役による田庄・采邑経営を行っているという矛盾を解決するため、さまざまな改革を行い、1400年にはとうとう自ら帝位に就く。しかしその性急な改革は必ずしも民の支持を受けることはなく、篡奪者討滅を名目にした明永楽帝の軍によりヴェトナムは占領され、わずか7年で胡朝は終わりを告げる。その後、明は直接統治を開始し、それに対して山岳部や南部地域を中心として抗明反乱が起こる。陳氏の末裔が起こした抵抗運動も一時期盛んとなるが、やがて鎮圧される。しかし反乱は散発的に続き、1417年、北部デルタの南に位置する清化（タインホア Thanh Hoa）の藍山（地図参照）で黎利（レロイ Le Loi）が蜂起する。10年に及ぶ戦いの後、27年に講和がなり、明軍はハノイ（東関城）から撤退してゆく。そして新しく黎朝（1428-1527、1533-1789）が誕生するのである。

#### 2 ナショナルな公定史観

現代ヴェトナム人史家の公定史観（ナショナルな史観）によれば、ヴェトナム史とは、「歴代政権が外からの侵略を被り、それに勇敢に戦って撃退してきた歴史」とであるとされる。

15世紀中頃のヴェトナム



出典：八尾隆生「山の民と平野の民の形成史——15世紀のベトナム黎明史——」『講座・東南アジア史』3，岩波書店，2001年，208頁。

現政権の母体であったヴェトナム民主共和国は社会主義政権であって、マルクス主義史観に従って階級闘争と民族闘争の両面に注意が払われ、それに従って過去の人物や事件、王朝などの評価に関する研究が多く発表された。また歴史学が科学であるという原則のもと、史料についても精力的に収集、翻訳作業が始められた。ただし、当時の政治的情勢から、階級闘争と民族闘争のどちらに比重を置くかをめぐっては揺り返しが激しかった<sup>3)</sup>。藍山起義の主人公である黎利についても、異民族統治から国家を解放した英雄であるという民族闘争面からの積極的な評価と、その後地主と妥協して「封建王朝」を創設したという階級闘争面からする否定的な評価の両方が存在した<sup>4)</sup>。しかし階級闘争史観の方は抗米戦の激化にともない、後退してゆく<sup>5)</sup>。

ハノイ国家大学所属社会人文科学大学教授ファン・ファイ・レ Phan Huy Le とファン・ダイ・ゾアン Phan Dai Doan 両氏の執筆になる『藍山起義』[Le and Doan 1965] は上述した民族闘争史

観による藍山起義研究の決定版ともいうべきものであり、現在も影響を与え続けている傑作である。

同書は戦争中にもかかわらず膨大な現地史料を収集、分析して陳末の混乱した社会的情勢、胡氏政権の持つ意味、明の侵略の意図と悪政の実態、黎利集団の形成と抗戦の過程を描き、その成功で締めくくっている。うがちすぎかもしれないが、前述の黎利の負の評価の時期、つまり黎朝初期に言及しないことにより、彼の英雄としてのイメージはより強力になったのである。

3 外国人研究者から見た問題点

日本人の先行研究として最もまとまったものとしては、山本達郎『安南史研究I——元明両朝の安南征服——』[山本 1950] があげられる。

同書では陳朝の滅亡と胡氏の篡奪、それに対する中国側の対応、外交交渉、戦争勃発の経緯とその経過、明によるヴェトナム直接統治の実態とそれに対するヴェトナム側の反発、藍山蜂起の経緯とその経過、終結・明の撤退に至るまでの経過がほぼ時系列に沿って叙述される。その一番の特徴は綿密な考証作業にあり、特に地名に関しては、『大南一統志』、『同慶地輿誌(圖)』、『欽定越史通鑑綱目』、それに植民地期の地図を基に考証されており、その成果は今では一部訂正を要するところもあるが、決してその価値を失ってはいない。

一方、欧米の研究者の代表作としてはウィットモア John K. Whitmore 氏の学位論文 [Whitmore 1968] があげられる。氏は黎利軍団のなかにタインホア出身者が多いこと、つまり集団に地域性があることに早くから注目し、彼らを「タインホア・グループ」と命名した。ただ彼の論文の中心は開国後の政治史であり、黎利および集団員の蜂起の理由やエスニックな違いまでには十分な言及がない。また、極東学院のマイクロフィルム版史料を多く使用しているが、山本氏の研究と同様、現地史料の利用が十分にできなかったという限界がある。

しかし今や時代は変わり、研究交流、史料収集の面ではるかに良い条件を得られるようになった。その状況については別稿 [八尾 2003] で紹介したが、そうした恵まれた世代の外国人研究者が問題とすべ

き点として、まず以下のようなことが考えられる。

#### (i) 地域性の問題

まず問題とすべきは「ヴェトナム」の枠組みの無前提の設定である。

黎利集団は別稿〔八尾 1988〕でも述べたが、その出身の大多数はタインホアでヴェトナム全土の英雄集団とはいえない。他にも抵抗勢力があって最後まで勝ち残って徐々に彼らを吸収していくこととなり、「開国功臣」となるのである。

黎利の参謀役阮膺は陳朝の外孫で、父と共に胡朝期の科挙官僚であったが、当時でももと胡氏の官僚であったことはあまり問題にされず、他の胡氏官僚も黎朝開国後に同様に用いられている。当初は決定的に明と対立する意志があったか怪しい黎利を最後まで補佐し、文武の質を備えた王者として演出したのは彼ではなかったのかとする論者もいる<sup>6)</sup>。

まず、『藍山実録』にも採録されている独立宣言ともいべき『平呉大誥』を詳しく分析したオハロウ Stephen O'Harrow [1979: 150-151, 170-173] は、この文章が黎利ではなく、阮膺によって書かれたものであることに注目する<sup>7)</sup>。そこにあらわれる強烈な「民族主義」は儒教の正統論に裏打ちされたものであり、中国の古典や故事に関する見識も確かなもので、丘陵地の首長黎利の発想になるものとは到底考えられない。彼をヴェトナムの正当なる王者として、明に対抗させようとしたのは、彼の考えや理想によるものだ、彼はそう主張する。

しかし阮膺は捕らえられているハノイから脱出して黎利軍に参加したため、紅河デルタ出身の科挙官僚であるにもかかわらず、同様の出身地、履歴をもつデルタの人士と必ずしも密接な関係をもってはいなかった。すなわち、黎利を儒教的観点から王者に推戴しようという彼の意志を、紅河デルタの知識人たちが共有していたわけではないのである。諸史料は黎利が一貫して「堅い意志、愛国の熱意」を持ち、民も熱烈にそれに応えたとするが、それらはすべて黎朝建国後のものであり<sup>8)</sup>、彼らの支持を得るための黎利と阮膺の苦悩は、建国直後からむしろ深まってゆくのである。

#### (ii) 民族(エスニック・グループないしは言語集団)の問題

以下で詳しく分析する根本史料である『藍山実録』でも、黎利の家が代々清化の丘陵地帯に「輔導」と呼ばれる、平野の王朝から一定地域の統治を許された小首長であることを明記している<sup>9)</sup>。自己の権益さえ守られれば、そしてその地位を安堵してくれる政権が相手であれば、彼に蜂起の理由、ヴェトナムを解放しなければならぬという「民族意識」など、当初からあったとは考えない方が自然である。

黎利および彼に従ったいわゆる功臣たちの中にはエスニックグループとして平野の民とは異なる文化を持っていた者もたくさん存在した。彼らの蜂起以前の生活状況は戦勝後の潤色で、家譜や『藍山実録』などからは伺い知ることは非常に少ないが、当時の状況からは、狭義のヴェト族とムオン族にきれいに分けられる状態にあったかどうかはきわめて怪しい<sup>10)</sup>。

現在ではかなり早期からヴェトナム民族としての集団性は出現し、おそくとも15世紀には確立していたとするのがヴェトナム史学界の一般認識であるが、地域性を加味すると再考の余地ありである。

民族的には「ヴェト族」への純化が進み、生態の面でも小農経営が確立しつつあった平野の民からすれば、「民族の英雄」としての黎利のイメージはいよいよ怪しいものとなってくる。しかしそれでも彼は蜂起し10年にもわたって戦いぬけた。それはなぜであろうか。

#### (iii) ラーンサーン

当時、インドシナ半島の中央部に盆地連合国家であるラーンサーン王国が勃興し始めた。当時同王国は四方に勢力を拡大しようとしていたが、西方のラーンサーンとは友好関係にあり、南方にはメコン下流域にクメールとチャオプラヤー下流域にアユタヤが存在した。北には新興明が存在し、手痛い敗北を喫している。海に出口を見いだしたい同王国の選択肢の一つとして、明の勢力がまだ十分には浸透していないヴェトナム中部地方があった。そこに黎利軍が存在したのである。一国史の目を離れた場合、実証は困難だがこうした政治力学上の条件から、彼の

蜂起に物質的基礎を与えたものとしてラーンサーンが考えられよう<sup>11)</sup>。そうした立場の弱みが黎利と阮廌にはトラウマとなり、黎朝建国後にラーンサーンに対する攻勢が始まるのである。

## II 『藍山実録』編纂の系譜

上述の藍山起義の「史実」、「言説」の根拠となり、研究の対象となった史料の中で、最も重要なものが、本稿で扱う『藍山実録』である。本章ではその編纂—修史の過程をたどってみたい。

### 1 『藍山実録』の内容

『大越史記全書』（以下『全書』）によれば、黎利は即位して黎朝の創設を宣言し、荒廃した国土再建と明との国交正常化への作業を開始するとともに、抗明戦で貢献したものに対して論功行賞を数次にわたって行った。順天元年（1428）には「隴崖<sup>12)</sup>功臣」への爵位授与、翌2年には生存している功臣を対象に功績に応じて爵位を与え、功績者ランキングともいえるものを布告している。

それが一段落し、明が彼を「権署安南国事」に封じた順天4年の末、『藍山実録』を著している。『全書』12月6日の条に「帝命作『藍山実録』、帝自作序、著藍山洞主」とあるのがそれである。

編纂理由として、黎利自序によれば、「自分（朕）の艱難の業を叙べ、以て後生の子孫に垂示するため」とあって、作成された後、宮中深く蔵された。

現在残存している『藍山実録』は写本がほとんどであり、ハノイの漢喃研究院等に数部の写本があるが、これらはすべて胡士揚の重刊序がついており、17世紀後半の重刊本の系統に属する。重刊本には古刊本が存在するとされてきたが、ブ タイン・ハン Vu Thanh Hang 氏による紹介論文 [Hang 1985] が発表され、1992年には現代ヴェトナム語訳つきの刊本影印本が刊行された（後述）。重刊本には重刊序の次に黎利の自序、それに本文と最後に重刊版編者のものと思われる評語がある。

ところが、それに先立つ1971年、タインホア省文化局の調査により、もと黎朝開国功臣黎察の子孫の家から、原『藍山実録』系統と思われる写本が発見された。そして、重刊本とは大きく内容の異なるこ

とが明らかとなった。以下では同書を詳細に考察したグエン・ズィエン・ニエン Nguyen Dien Nien [Nien 1976] に依拠してその内容と変遷をふりかえる。

まずこの写本は大きく重刊本と構成が異なる。以下にその構成を列挙する。

(ア)「奉記一本」から始まる聖宗—憲宗期の科挙官僚譚文礼の奏文その他

(イ)太祖の父（顯祖）、祖父（宣祖）から恭帝に至るまでの各帝、皇后の諱の一覧

(ウ)「奉事図式」「太廟図」といった内外の廟閣の一覧

(エ)自序 藍山洞主（黎利の自序）

(オ)本文 当然ながら重刊本末尾にある評語はない

(カ)本文に割り込む形で「註」内容は黎利が生まれる前によく出現した黒虎が利の生後見えなくなった（利が黒虎の生まれ変わりということを暗喩）という逸話

(キ)「洞主述天與天人歸序」白衣の僧が現れ、黎利がいずれ帝位につくことや、黎朝の命数を告げたという逸話

(ク)「藍山記跡序」黎利の臣である黎慎が宝剣と宝印を得たという逸話

(ケ)「卑辞厚惠序」黎利の父の遺骨を明軍が奪ったという逸話<sup>13)</sup>

(コ)再び本文

(サ)順天元年10月28日付け「定封行賞」の内容と行賞を受けた35人の名前と出身地の列挙

(シ)天慶元年付け「誓文、誓詞」洪徳期に功臣子孫に一道ずつ与えられたとある。および「諸將詞」司礼監阮郭の名で発給

(ス)景統3年8月1日付け「録開国功臣、并中興功臣」125人（『藍山実録』有姓名36名、『藍山実録』無姓名88名）の名と履歴、出身地の一覧

(セ)隴崖功臣表（1428）隴崖会盟時から蜂起に参加した者を功一次、二次、三次に分類

(ソ)功臣ランキング表（1429）封爵を受けた功臣ランキング93名

(タ)「皇宗陣亡」「功臣陣亡」「功臣薨歿」陣亡、薨歿した者の一覧

もちろん、これらのすべてが順天本についていたわけではないことは明らかである。ただ順天4年(1431)以前に書かれたもの((サ)(セ)(ソ)など)は、付録として順天本にすでにつけられていたようである。

## 2 各時代の『藍山実録』修史

前述のごとく、『藍山実録』には多くの付属文書があるうえに、本文にも改編がみられる。本節ではニエン氏の考証[Nien 1976]に多くを拠りながら(見解を異とする箇所も多いが)、その修史の過程を追ってみたい。

### (i) 15世紀の修史

まず、黎朝が成立した後、順天2年の功臣ランキング(ソ)に沿って指導体制が組織されていることから、少なくともこの一覧は公表されていたと考えられる。そして国家側と功臣側の両方の要請により、もともとは自序と各種の祭文、ランキング表だけであった順天本にさまざまな付録が加わってゆく。その中で聖宗から憲宗期にかけての『藍山実録』有無姓名表(ス)作成がその最たるものである。

黎朝創建から半世紀が過ぎ、多くの功臣が冤罪やクーデタで除かれていった。そのため、誰が功臣で、誰がその子孫であるかが不明なことが多くなってきた。そこで、実録そのものをチェックすることにより、実際に戦闘場面为名前が出てくるかを譚文礼に調べさせた(ア)のが『『藍山実録』有無姓名表』だとニエン[Nien 1976:42]は推測する<sup>14)</sup>。

15世紀を通じてこうした要請によってさまざまな付録が付け加わってゆく。しかし威穆帝のころから始まる混乱期を迎え、16世紀初順天原本と譚文禮本は、陳暲の反乱軍による京師略奪および莫氏による篡奪の混乱期に失われたと考えられる。

黎初(15世紀)の『藍山実録』修史とは、黎利の帝王としての地位を確たるものにし、官僚制国家をめざしてぎくしゃくする後代の黎帝と功臣の関係を何とかつないでおこうとする努力にもとづき、原『藍山実録』にさまざまな付属文書を作成したものであった。この意味で、結局、前期黎朝政権はティンホア政権としての限界を超えられなかったといえ

よう。

### (ii) 16世紀の修史

16世紀前半の騒乱を制して莫氏が黎朝を専断し、デルタの支配者となった。しかしその後もそれに納得しない者は、ラーンサーンの援助を受けて昭宗の子(荘宗)を擁立し、ティンホアを中心として抵抗を続ける。その多くは開国功臣の子孫たちであり、最初、嘉苗阮氏の傍系である阮詮<sup>15)</sup>がその頭目であったが、彼の死後、その女婿の鄭檢に権力はうつり、危険を感じた子の阮潢は南に遷り、臣従を誓うが独立性を高める。

ところが荘宗の子の中宗没後、黎朝直系が途絶え、鄭檢は黎利の兄筋(黎除-黎康)の末裔で、ティンホアの民間で育った黎維邦(廟号英宗)を帝位につけた。

件の写本の(ウ)太廟図には中宗までしか書かれていないので、同書もしくはその基となったものはこの英宗期のものとニエン[Nien 1976:44-46]は推測する。ではそれがどうして黎朝の子孫の家から発見されたのか。ニエンの想定[Nien 1976:54-55]は、傍系である英宗にも原本系統の『藍山実録』の写しが伝わっており、影の薄い立場であった英宗が、『藍山実録』を多数複写して功臣の子孫らに頒布し、自らの権威の高揚を狙ったのであろうというものである。確かに英宗は野心の強かった人物らしく、鄭氏の後継者争いに乗じて政治の実権を鄭氏から取り戻そうとして失敗し、檢の子鄭松に弑殺されている。

現在知られる限り、ながく続いてきた原本系『藍山実録』の修史はここでストップするが、とにかくある程度この英宗版はティンホアを中心に流布することとなる。この16世紀の修史はデルタの莫氏に対抗してティンホアに拠る黎氏の正統性強調のための修史、そしてそれは黎帝をないがしろにする鄭氏にも向けられたものとも考えられよう。

### (iii) 17世紀の修史

鄭-黎政権と莫氏政権間の戦いが前者の勝利に終わった後、17世紀に入ると今度は南に遷った阮氏との間で戦闘が始まる。1627年から72年まで断続的に

続いた後、鄭柞の時代に平和が訪れ、鄭氏は内政の方に力をつくすように政策転換し、黎氏の後見人としての立場を強固にすべく、一連の書籍編纂が進められた。そうした史書の中に『藍山実録』(重刊版)があった。

重刊版序によると、上梓されたのは永治元年(1676)で、編纂者は胡士揚ら科挙系官僚である。前年、12歳で即位したばかりの黎帝熙宗は、(即位前から)宰執儒臣等と古えの帝王の事跡を知るために、民間に伝わる旧史(原本系『藍山実録』を指すであろう)を読んでいたが、それらには「錯簡」が多いのでその誤りを正し、祖君の功業を未来にまで伝えるため再編纂を命じ、裁可を与えて版行したとある。しかし、事実はそうではなかった。重刊版に残されたのは自序と本文のみで、さまざまな付録はすべて削除され、重刊序と評語が加えられたのである。こうした改変に対して、ニエン[Nien 1976: 147-148]は英宗の四代の孫である熙宗が、英宗の行った改竄<sup>16)</sup>を隠蔽するためとしているが、筆者はそうは考えない。編纂起案から編纂方針、そしてその功績までがすべて鄭王によるものであることにニエンは全く注意を払っていない。

漢喃研究院所蔵重刊本写本『藍山実録』(VHv. 1695)には同じ永治元年の序をもつ、鄭氏による黎朝中興の歴史を記した『大越中興功業寔録』<sup>17)</sup>が合綴されている。その序文は鄭氏の功績を称える言葉で満ちており、黎帝より『中興寔録』の名を賜って録梓して<sup>18)</sup>天下に頒布するとある。有り体にいえばこの『中興寔録』により、『藍山実録』の価値は事実上半減したのである。

では功臣表までが削除されたのはなぜか。これも当然のことである。鄭氏は黎朝中興功臣のトップではあっても、開国の功臣の後裔ではないからである。『藍山実録』を重刊・配布してティンホア地域主義を煽るのはいいが、功臣表は鄭氏の権威を損ねかねないものでしかないのである。

17世紀の修史とは、文臣に役割を發揮させる一方で、ティンホアの凝集性の対象を鄭氏に振り向けるための修史であったといえよう。

#### (iv) 18世紀の修史

18世紀に入り、黎-鄭政権に反抗する叛乱が相次ぐ中、上記の修史に異議を申し立てたのがヴェトナム前近代を代表する大学者黎貴惇である。彼は科挙に登第した後、鄭王府の高官として仕え、多くの著作を残した。その中のひとつ『大越通史』の芸文志で民間に伝わる写本(原本系統)に誤りの多いこととともに、重刊本による改竄のひどさを指摘している<sup>19)</sup>。ただし、彼は鄭氏批判を行ったわけではないので、前述シンポジウムの席では筆者は彼の行為を「文人の意地の修史」とあいまいな言い方で表現したが、大阪大学の桃木至朗氏から、当時の東アジアを覆っていた考証学の影響も考慮すべきではないかとのこと指摘を受けた。

確かに彼は清朝に奉使し、『北使通録』なる書も残している。また最近、清水太郎氏は中国を舞台にして、各朝貢国の使節団間に文化的交流のあったことを紹介されており[清水 2002-2003]、そうした交流の影響も大きかったことは十分考えられる。18世紀の修史は「東アジア世界考証学スタンダードに従った修史」とでもいうことができよう。しかし結果として貴惇の主張は注目されず、版本が出たために原本系の書はすたれ、重刊版をもとにした写本が多く見られるようになる。鄭氏の意図の半分は成功したのである。

#### (v) 19世紀の修史

藍山蜂起から始まった黎朝は、タイソン阮氏の攻撃と、黎帝の中国への亡命(1789年)という形でその幕を閉じた。南方の広南阮氏政権もすでに崩壊していたが、その宗室の生き残りである阮福暎がタイやフランスの支援のもと、南から反攻に転じ、1802年には阮朝を開いた。清朝も彼の正統性を承認し、1803年に越南国王に冊封した。

同王朝は広南王国を築いた阮潢を始祖と認定しているが、実際の歴史は前述の如く藍山起義にまでさかのぼる<sup>20)</sup>。にもかかわらず、阮朝の正史である『大南寔録』前編ではそうした記述がない。これも原因は単純なもので、確かに阮氏は黎朝を篡奪したわけでもなく、いわば仇を討った形なのだが、阮初にも黎朝復興を唱える者が存在した。『藍山実録』

は阮氏が黎氏の家臣であったことを示すものであり、積極的に清化出身者であることを示す必要はなかったのである。

また歴代の王朝が中国から侵略を受けたのに対して阮朝は例外的に戦争をしていない。このことも『藍山実録』を積極的に取り上げない大きな理由だったのであろう。筆者が調べた限り、阮朝期には多くの書籍が版行されたにもかかわらず、『藍山実録』が再刊された形跡はない<sup>21)</sup>。19世紀の修史とは、ティンホア無視、黎朝忘却のための「不」修史なのであろう。

#### (vi) 民間の修史

以上のような歴史に翻弄された『藍山実録』であるが、民間では本や書類というものをどのように所有し、扱っていたのであろうか。

最も興味深いのは「家譜」とか「族譜」と呼ばれる「一族、家の歴史をつづった書」である。中国などでは刊行されているものも多いが、ヴェトナムの「族」の範囲は狭く、ほとんどが写本の形で各家庭にいまも多く蔵されている。

最近、末成道男氏は、漢喃研究院が所蔵する家譜を精力的に研究され、さらに地方で収集された家譜を中国のものと比較し、ヴェトナムの家譜の特徴についていろいろ示唆に富む論述を行っている。

氏の指摘する重要な特徴の一つは、家譜の「中空構造」である [末成 1998: 307-308]。すなわち、家譜の実際の記述を見て行くと、現に生きている者に近い世代のことは非常に詳しく記されている。また、一族の始祖(開村・開族に関わった人物や、国家の高官となった者などがそう認定される)に関しても詳しい記述がなされる。しかしその両者の間の人物の記述は多くが簡略で、名前や号くらいしか伝わらないことも多く、傍系の兄弟がいたかどうかについての言及すらないことが多い。氏がいう中空構造とはこのことを指す。

氏の指摘は当を得たものと考えるが、筆者は特に15世紀の功臣子孫の家譜収集を行っているため、扱う家譜の性格には若干の違いがある。

筆者が扱う家譜も、現存のものは阮朝時代のものが大半ではあるが、原家譜はおそらく15世紀頃から

作られていたと推定される。そしてその作成にあたっては、功臣に国家から賜与された多くの文書が利用された。実際家譜の中にはそうした文書が加工、省略された形(ゆえに作偽の存在を否定できない)で収録されていることが多々ある。

そこで非常に多いのが前述した功臣ランキング表や「藍山実録有無姓名」表である。筆者が収集したものだけでも、丁列家譜、范文偉家譜<sup>22)</sup>、ゾアン氏所蔵の宋歴不明の古文書断片、漢喃研究院の『大越歴代帝王事跡』(VHv. 1305)、『藍山実録続編』(VHv. 1384)など、『藍山実録』の本文は脱落しているのにランキング表だけが残っている。鄭氏の目論見が半分だけ成功したといったのはこのことを意味している。彼らの収録の目的はもちろん国家天下のためではなかろう。功臣子孫としての名譽と特権を享受し、同時に族の結束をはかるのが最大の目的だったはずである。ために重刊本というところの「錯簡」が多く行われたのである。おのが家のための修史、これが民間の修史である。もはや『藍山実録』の本文は問題ではなく、ランキングや「有無姓名」の方が重要なのである<sup>23)</sup>。

#### (vii) 植民地期の修史

フランスは19世紀後半からヴェトナム侵略を開始し、阮朝を保護国とする一方、ハノイに極東学院を置いて、東洋学研究所の拠点とした。その所員らは独自に資料を調査・収集するかたわら、阮朝内閣図書館蔵の書籍の調査も行い、一部は筆写させ、学院に残している。『藍山実録』も前述の如く、幾つかの写本が収集され、書誌学的考察の対象となっている<sup>24)</sup>。

またフランスの支配に対するヴェトナム人の抵抗運動はさまざまな形で継続したが、藍山蜂起をその道具として利用しようとした形跡もみられない。1880年代の勤王運動の中心人物である咸宜帝の反仏檄文を桜井由躬雄 [1991] は詳しく分析し、中国の古典を縦横に用いていることを明らかにしているが、その檄文に藍山蜂起への言及はない。

『藍山実録』がプラスでもマイナスでもない、初めて近代的な歴史学の研究対象とされ、実際の政治運動とは一線を画することとなった、それが20世紀

前半の修史であった。これは研究者の大半がフランス人であったことがその理由のひとつであろう。

#### (Ⅳ) 独立期－ヴェトナム戦争の時代の修史

1945年、ヴェトナムは日本の敗戦を機に独立を宣言した。そしてその翌年には早くもマク・バオ・タン Mac Bao Than の翻訳本がハノイで出版されている<sup>25)</sup>。残念ながら訳者の跋では翻訳に至った理由の説明が不十分であるが、都市の住民は確実にナショナリズムに巻き込まれていった。しかしフランスはヴェトナムの独立を容認せず、46年より第一次インドシナ戦争が始まり、54年のジュネーヴ協定でようやく北半分だけがヴェトナム民主共和国として独立し、南にはフランスに代わってアメリカの支援を受けたヴェトナム共和国が成立する。

歴史書籍に関していうと、極東学院が収集した書籍はすべて社会科学図書館が引継ぎ、やがて成立した社会科学委員会所属漢喃研究院に収蔵された。また、各機関が個別に持っていた漢喃史料の多くも漢喃研究院に移管されたようである。一方、阮朝最後の皇帝バオダイ Bao Dai は45年に退位を宣言し、阮朝は消滅する。そして56年以降、旧王宮書籍は南ヴェトナム政権に移管された<sup>26)</sup>。

前述のごとく、抗米戦争により、「民族闘争史観」が勝利を収め、多くの歴史的英雄、しかも北部で戦った英雄が戦争に動員された。徴姉妹、李常傑、陳興道、阮恵らが『歴史研究』で多く取り上げられ、単行本も山のように出された。黎利・阮鷹のコンビも例外ではない。1969年にはヴェトナム社会科学委員会によって翻訳本『阮鷹全集』(Nguyen Trai Toan tap) が発行され、その中にも『藍山実録』は含まれている。そして1971年には英宗版を基としたと思われる写本が発見され、76年に考証付き翻訳本が刊行された。タインホア民間の地域エゴを超える規模で国家に奉仕し、反侵略戦争に奉仕するための修史の対象として、『藍山実録』は復活したのである。ホアン・スアン・ハン Hoang Xuan Han 氏寄贈の重刊版が影印出版されるのが1992年である。

#### 結びにかえて

上記の如く、前近代ヴェトナムにおける歴史書編

纂活動の連続性と、その連続性が近現代まで及んでいることを、シンポジウムでは強調した。近代に入りヴェトナムでは国語表記をローマ字にし、漢字は廃された。漢文からローマ字表記に変えられたことは一見断絶性を想起させるが、事實は逆である。ローマ字ヴェトナム語表記に代わったとたん、英雄はより身近な存在となる。黎利＝レロイ (Le Loi) などというのはきわめてありふれた名前前で、今のヴェトナムにはおそらく100人を越すレロイさんがいるであろう。

しかも、それ以前の世界でも、語りの世界、ムラで長老が皆に家譜をそらんじて読み聞かせ、講釈を加える場においては、口語と漢文の感覚上の差異は稀薄であったろう。民間の修史を国家に奉仕する修史に直結させることの容易さが、ヴェトナムの公定史観を生む歴史的環境の一つだったのである。

では戦争が終わった今、新しい画期が生まれ、「史料」と政治社会は分離したかということ、決してそうではない。公定史観は残ったまま、観光目的で英雄はさらに英雄となり、(史跡指定を受けるために)家譜などの編集は続行され、謝礼目的でそれに故意に迎合した「修史」に協力する「学者」も少なくない。

公的には現在漢喃院にヴェトナム家譜学センターが設立され、またユネスコの肝いりでヴェトナム各同族連絡協議会も設けられ、こうした家譜の収集と再編纂が進んである。しかしそれに関しても筆者は懸念を抱いている。編纂とはもともとある史料間の矛盾をなんとかかまとめるという側面を有している。そしてヴェトナム語による決定版ができたとき、漢文原本は散逸の危機に立たされる。漢喃研究院や史学院、ハノイ大学等が中心になってこれらの原本保存に努力してくれることを切に望みたい。2002年、タインホアを訪問する機会があり、最古写本の保存状況を聞いたが、省図書館の回答は「行方不明」であった<sup>27)</sup>。

\* 本稿は2003年度文部科学省科学研究費(特定領域研究(2)『東アジア出版文化の研究』)の研究成果の一部である。

<参考文献>

- アンダーソン, ベネディクト (白石さや・白石隆訳), 1997, 『増補・想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』NTT出版(原著初版1983, 増補版1991)。
- 檀上 寛, 1995, 『明朝専制支配の史的構造』汲古書院。
- 古田元夫, 1988, 「ベトナム史学界とベトナム史像」『歴史と文化』(東京大学教養学部) 16。
- 加藤久美子, 2000, 『盆地世界の国家論——雲南, シンパンナーのタイ族史——』京都大学学術出版会。
- 永野善子, 2000, 『歴史と英雄——フィリピン革命百年とポストコロニアル——』御茶の水書房。
- 桜井由躬雄, 1991, 「『王国』の崩壊——1835年ベトナム大反乱——」『講座・東南アジア学』9, 弘文堂。
- 清水政明・Le Thi Lien・桃木至朗, 1998, 「護城山碑文に見る字喃について」『東南アジア研究』36(2)。
- 清水太郎, 2002-2003, 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅」(1)~(4)『北東アジア文化研究』12, 14, 16, 18。
- 末成道男, 1998, 『ベトナムの祖先崇拜——瀬曲の社会生活——』東京大学東洋文化研究所。
- 山本達郎, 1950, 『安南史研究 I ——元明両朝の安南征略——』山川出版社。
- 八尾隆生, 1988, 「ヴェトナム黎朝初期の清化集団について」『東洋史研究』46(4)。
- 八尾隆生, 2001, 「山の民と平野の民の形成史——15世紀のベトナム黎朝史——」『講座・東南アジア史』3, 岩波書店。
- 八尾隆生, 2003, 「もう一つのヴェトナム近現代史——ヴェトナム前近代史料の歩んだみち」『歴史と地理—世界史の研究』566。
- Dao Duy Anh, 1957, *Van de Hinh thanh cua Dan toc Viet-nam*, Xay dung Xuat ban: Ha Noi.
- Gaspardone, Emile, 1935, "Bibliographie annamite", *BEFEO* 34.
- O'Harrow, Stephen, 1979, "Nguyen Trai's *Binh Ngo Dai Cao* of 1428: The Development of a Vietnamese National Identity", *The Journal of Southeast Asian Studies* 10(1).
- Li Tana, 2003, "The Ming factor and the Emergence of the Viet in the 15<sup>th</sup> century", Paper of the Workshop on Southeast Asia in the 15<sup>th</sup> century and the Ming factor (18-19 July 2003, Singapore).
- Mac Bao Than (trans.), 1945, *Lam Son Thuc luc*, Nha xuất ban Tan Viet: Ha Noi (2<sup>nd</sup> ed. 1949, Nha xuất ban Tan Viet: Sai Gon. 3<sup>rd</sup> ed, 1956,

- Nha xuất ban Tan Viet: Sai Gon) .
- Nguyen Dien Nien (investigate), Le Van Uong (trans.), 1976, *Lam Son Thuc luc —— Ban Moi Phat hien ——*, Ty Van hoa Thanh Hoa.
- Phan Huy Le, Phan Dai Doan, 1955, *Khoi nghia Lam Son*, Nha xuất ban Khoa hoc Xa hoi (NXB-KHXH)(2<sup>nd</sup> ed., 1959, 3<sup>rd</sup> ed., 1977).
- Tran Nghia (trans. and annotate), 1992, *Trung san Lam Son Thuc luc*, NXBKHXH.
- Vu Thanh Hang, 1935, "Ve ban Lam Son Thuc luc do cu Hoang Xuan han gui tang", *Nghien cuu Han Nom* 2.
- Whitmore, John K., 1968, "The Development of Le Government in Fifteenth Century Vietnam", Ph. D. Dissertation, Cornell University.

- 1) フィリピン学者の描いた英雄ポニファシオ像には史料の問題があると、「英雄の捏造」の可能性を指摘したグレン・メイに対して、そうした批判の裏には「植民地史観」への回帰の意図があるとのフィリピン人研究者の反論がある。詳しくは永野善子 [2000] を参照。
- 2) 雑誌『歴史評論』でも同様の趣旨「近代ナショナリズム以前のネイション」に基づく特集号(1998年12月号, 通号584号)が組まれている。
- 3) スターリン・テーゼに厳密に従えば, 1945年以前に「民族」は存在しないことになり, 「民族」を構成する諸要素はすでに14-15世紀には揃っていたとする Dao Duy Anh [Anh 1957] 等は, 当初は批判の対象となった。
- 4) この一見相反する評価は, 「異民族王朝打倒」を旗印に明を創立させた朱元璋(明太祖)に対する共産主義中国の論争と相通するものがある。中国での論争の経過については檀上寛 [1995: 序説] を参照。
- 5) こうした学界における論争の経緯については古田元夫 [1988] が簡潔にまとめている。
- 6) 阮膺には著作が多くあるのに対して, 黎利にはこれから扱う『藍山実録』くらいしかないのであろうがヴェトナムでも黎利よりも阮膺に関する研究論文の方が相当多い。
- 7) 阮膺の遺稿集である『抑齋集』巻3に収録されているほか, 『藍山実録』や『大越史記全書』にも全文が掲載されている。
- 8) 諸史料によれば, 蜂起の発端は近隣の者との土地争いであるが, それ以前に多くの超自然現象(すなわち天命)が現れ, 彼に抗戦への意欲を与え, 蜂起の準備を行っていたとする。これを顔面通りには受け取れ

- ないであろう。
- 9) 現在のヴェトナムには54の民族が居住している。その一つムオン族は今でこそ少数民族の一つでしかないが、ヴェトナム語族という呼称で知られるように、もとはヴェトナム族と一つの「民族」であった。もともとデルタの後背山地地帯の盆地などに居住していた彼らのうち、山を下り、平地の民と混血し、その先進文化を摂取したのがヴェトナム族であり、山に残ったのがムオン族であると一般的には説明されている。
  - 10) ニンビン省（平野の民の世界）にある護城山碑文は14世紀のもので、清水政明、桃木至朗らの考察〔清水・Lien・桃木 1998：169-176〕では、ムオン語の特徴である「双音節」単語を二つの字喃に分けて表記するという現象が依然として残っているという。
  - 11) 後にはランサーン「哀牢」という山地蛮国と軽視されるが、これも後付の評価にすぎない。タイ系諸国家の勢力の大きさについては加藤久美子〔2000：第1章〕のほか、最近ではリタナ Li Tana〔2003〕の指摘がある。
  - 12) 起義にあたって会盟を行った場所。
  - 13) 重刊版では（カ）～（ケ）の部分は整理されて本文に組み入れられている。
  - 14) ただし、無姓名であるからといって功臣としての地位を削除されたりしたわけではない。
  - 15) 阮公笋は開国功臣であり、その長子徳忠は聖宗擁立に功績があり、その娘は聖宗后となるが、その直系は威穆帝の殺戮を被り、ふるわなくなる。そしてその傍系の阮文郎らが、翼翼帝の擁立に貢献する。その子の弘裕は莫氏と戦い、敗死するが、別の傍系から阮淦がでて黎朝再興をめざすことになる。
  - 16) 本文文頭の未整理の「注」や序でもないのに「序」とされる部分は、原本本文の一人称が「朕」とあるのに「帝」とあって、後の時代、おそらく英宗時代に改竄されたこととニエンは想定する。特に英宗本の（キ）では白衣の僧が黎朝の命数と中興への言及があり、当時のタインホア亡命政権に都合の良い記載であることをニエンは強調する。
  - 17) 阮朝時代の写本らしく、避諱のため「寔録」とある。
  - 18) 鈔梓されたはずの版本に関しては筆者未見。
  - 19) 藍山實録、本朝太祖御製、起平至平吳時事。旧書猶存、但人家抄録、多有訛字。今印本、乃永治年間、儒臣奉命訂正。只拋所見、以意刪改、增損失真。非全書也。
  - 20) 1995年に公刊された『阮福族世譜』（ヴェトナム語）はその祖先を10世紀の丁氏政権の重臣阮闕にまで遡らせている。
  - 21) 皮肉なことに、史書ではなく、藍山起義をテーマとした『皇越春秋』（別名『越藍春秋』）という章回小説が版行されている。
  - 22) 丁列家譜はゾアン氏がタインホアで収集したもの。范文偉家譜はハバック省ランザン市近郊で筆者が収集。
  - 23) 筆者はこうした人々の営為を「捏造」とか「偽作」ときめつけることに強い抵抗を感じる。これらの文書は決して歴史史料として編纂されたものではなく、それを研究者が「勝手に」「歴史史料」として、その価値を云々するのは不遜にすぎる。「捏造」とか「偽作」と決めつけたとたん、文書との対話は途絶えてしまうだろう。営為の底にある「史実」をどうくみとるかを我々研究者は真摯に考える必要がある。筆者は決して「ヴェトナム史のグレン・メイ」にはなりたくない。
  - 24) たとえばガスパルドン Emile Gaspardone〔1935：79-80〕など。
  - 25) 同翻訳本は第3版まで南政権下のサイゴンで出版されている。愛国主義を称揚する点で南北政権に違いはないということであろうか。
  - 26) 南北統一後、それらの書籍は改組となった国立第二公文書館（ホー・チ・ミン市）に蔵されていたが、90年代にすべて第一公文書館（ハノイ市）に移管されたとの回答を第二公文書館館員より受けた。
  - 27) 幸い、ゾアン氏が原写本から再写した写本を私蔵されているほか、ハノイの文学院にこの原写本を訳したレ・ヴァン・ウオン Le Van Uong氏自身が再写した写本（図書番号：HN.32）が蔵されている。